

# 和解を刻み続けてきたコー会議の心とは



総合研究開発機構理事長 **星野進保**

国際MRA日本協会副会長  
難民を助ける会会長  
日韓女性親善協会会長

**相馬雪香**

国際MRA日本協会理事  
衆議院議員

**藤田幸久**

## MRA コー会議とは

**星野** 本日は、MRA 活動の中心におられる方、お二人にお越しいただきました。

1996 (平成8) 年8月、スイスのコーにおきまして大変盛大な、しかも有意義な MRA の会議が行われました。私ども NIRA としても参加させていただきました。そこで最初に、MRA コー会議について紹介させていただきたいと思いません。

MRA (Moral Re-Armament: 道徳再武装) 運動とは、第二次世界大戦勃発が足音を忍ばせて間近に迫りつつあった1938 (昭和13) 年、アメリカのルーテル教会牧師のブックマン博士とオックスフォード大学の学生との対話の中から生まれたもので、経済面では大恐慌に、政治面ではヒトラー、スターリン等の台頭に脅かされていた当時の世界を変える必要性を感じ、かつそれを新たな組織をつくることで実現するのではなく、個人が自らの過ちを正すことから社会を変えて

いこうと考えたとされています。同年9月、スイスのインターラーケンにおいて、MRA のための第1回世界大会が開催されました。

第二次世界大戦後、MRA は活動拠点としてコーのマウンテンハウスと呼ばれる建物を確保しました。ここで行われる会議のことをコー会議と称しています。コーは、ジュネーブ郊外の山の懐に抱かれ、レマン湖が眼下に広がる風光明媚な土地であり、マウンテンハウスの建物は、1902年 (明治35) に建設されたスイス最大の一流ホテル「コー・パレス」として、世界の著名人、芸術家が宿泊したことで知られており、戦時中は避難民収用所として使われていました。

スイスの若き外交官であり第二次世界大戦勃発前より社会情勢の悪化を懸念していたフィリップ・モテュー氏は、MRA の運動に当初より関心を寄せ、1942 (昭和17) 年ごろより、ヨーロッパの将来は独仏の新しい関係の構築如何にかかっていると考え、その和解の場としてコーが適当だと考えていました。そして第二次世界大戦が終戦を迎えて間もない46 (同21) 年5月、モテュー氏は、寂れたコー・パレスがスイスの

銀行の所有を離れ、間もなくフランスの会社で買い取られ、調度品だけを取り除かれる運命にあることを知り、婦人と何とかコー・パレスの建物を救いたいと呼び掛け、こたえてくれた友人たちとともに金策に走り、遂にコー・パレスを取り崩しから救出しました。100人以上のスイス人のボランティアが廃墟と化していたコー・パレスをわずか9週間でマウンテンハウスとして改修し、同年7月、MRA コー会議が開催されるに至ったのです。これがコー会議の始まりです。

コーのマウンテンハウスは、古くはドイツのナチスとフランスのレジスタンスをはじめとする数多くの出会いと和解の場を提供し、非国家主体として歴史をさまざまな形で生み出してきました。MRA は、コーにおいて敵対する人々が、会議やサービスと称される共同作業を通じて自然に個人として出会い、その苦い思い出や憎悪を超えて話し合い、それぞれが変わって、許し合い、癒す機会を数多く作り出してきた伝統を持っているのです。

1996 (平成8) 年夏のコー会議には、NIRA から数名が参加させていただきました。この会議で、マーセル・グランディー氏 (MRA コー財団理事長) が「和解 (reconciliation) は、物事の終わりではなく、神の思召しに従い、世界を再構築するための始まり、いわば新しい世界づくりへの入口 (door) と考えたい。和解とは、偏見に別れを告げ、もって内なる自己を癒し、希望を持つことである。言い換えるならば、和解とは内なる自己を自由に解放することでもありと考えている。そこで、コーは対話と自己再発見の場であり、それを参加者に体験していただくことを希望する」と述べられました。

なるほど、マウンテンハウスの中に入った途端に肩の力が抜けて、何となく穏やかな、リラックスした気持ちになる雰囲気満ちているというのが私の第一印象だったので、まさに参加者全員がグランディーさんが言われた、「自己再発見の場」であるというお気持ちで参加されているということが、この会議を大変素晴らしいものにしたのではないかと気がいたしました。

また、今回は50周年記念コー会議ということで、チベットのグライ・ラマ師も参加されまして、「20世紀は紛争の世紀で

あったが、21世紀は和解の世紀になることを期待する」と大変印象的なお言葉を述べられました。

## MRA との出会い

**星野** そこで、まず相馬さんから、MRA との出会いについてお話をいただけますでしょうか。

**相馬** 私の出会いは1938 (昭和13) 年のことです。当時は日本が一体どうなってしまうのかという、とても重苦しい時代でございました。

まず、満州事変が始まった1931 (昭和6) 年9月18日、私は父 (尾崎行雄氏) と共にロサンゼルスにいました。私はまだ19歳でよく分からなかったのですが、父はとんでもないことが始まったという印象を受けたようです。次いで、ワシントンでフーバー大統領 (当時) に会って帰ってきた父が「残念で仕方がない。明治天皇以来築き上げてきた日本の信用が失われる」と言い、私はその時初めて、人間にとって信用が必要なように、国にとっても信用が必要であり、国と人間との結び付きが大切なことであると感じたのです。

父は道義的に正しくないからと、満州事変に反対しましたが、日本はそれを受け入れず、「いい加減に黙れ」というような手紙が日本から沢山送られて来ました。1933 (昭和8) 年1月に帰国した時には、神戸では上陸許さじというようなデモがあったほどです。

その船の中で、たまたま国家主義運動家の北一輝氏らと一緒にになりました。北氏は、「これからは西欧に対してアジアはアジアとしてやっていかなくてはいけない。日本はそのアジアの盟主にならなければならない」と言い、父は「そんな時代ではない。世界は一つであり、アジアだ西欧だと言っている時代ではなく、世界全体を考えなければだめなんだ」といった具合に毎日のように議論していました。

そして、同年3月、日本は国際連盟を脱退し、いよいよ孤立してしまう。その時も父は「世界から孤立したらだめだ」と盛んに言いましたが、いくら何を言ったってどうにもならないやせなさがあったようです。

私は学生のころから、日本は女性の解放をしなければ真の

平和は来ないと思っていました。そんな私に親友の一人が「オザコ（愛称）が何言ったってだめよ。日本の家庭を知らないのに、日本の女性の解放だなんて言ったってだめよ」と言った言葉が胸に残っていました。その時私は「じゃ日本の家庭



そうま ゆきか  
（旧）国際 MRA 日本協会副  
会長  
難民を助ける会会長  
日韓女性親善協会会長

に入ればいいんでしょ」と啖呵（たんか）を切ったものの、なかなか相手が見つかりませんでした。

そこへ相馬（旧子爵 相馬恵胤氏）が現れ、結婚したのが1937（昭和12）年。古い伝統を持った相馬家に入ったものだから、朝から晩まで、すべてがカルチャーショックでした。でも、日本の国を変えるためにはここ（家庭）から始めなければと思っていましたし、そればかりではなく、相馬に対しての愛情もありましたので、何とか頑張ろうとしたのですが、どうにもならないのです。

そのうちに子どもが生まれようとする。この子が生まれて6年たてば、国民学校に行かなければならない。国民学校に行けば、「世界に冠たる大日本帝国は」ということを教わる。私はそんなことを自分の子どもに教えられない。世界の中の日本であって「世界に冠たる」という思想はとて受け入れられない。でも、いくら私が受け入れられないと言ってもどうにもならない。どうしたらいいか分からなくて行き詰まっていた。

もともと私は、オックスフォード・グループ（1921年にブックマン博士を中心にイギリスのオックスフォードで形成された MRA の母体）の存在は知っていたのですが、キリスト教に対して反発を持っておりましたので、そうしたものに対しては頭ごなしに退いていました。

そんな時にたまたま、アメリカから来た MRA の人と会

い、話をしました。その時も私は「神様を信じていません」と言いましたが、その人に「神様があなたを信じていたらどうするのです」と言われ、話をしていくうちに、私は人のことばかりを悪いと責め、怒るものの、状況は何一つ変わらないことを認め、人を変えるにはまず自分が変わらなくてはならないことを悟りました。自分が変わるには、「信じようが信じまいが、神の意志に従って生きるということから始めるのです。それには『4つの絶対』の標準—絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛という物差しに照らしてまず自分の間違っていたところを見つめる。そして静まって、自分の心の中に何か響いてくるもの（ガイダンス＝ひらめき、心の中の声）を感じたら、それを書きなさい」と言われました。

確かに、女性の解放のために役立とうと思って結婚してみたものの、自分にはどうにもならない。国もどうにもならない。家庭もどうにもならない。もし、それが突破口になるのならやってみようかと思ったのです。

まず、これだけはできないということがあったら、それを捨てよと言われました。そこで、生活環境の全く異なる家に、大啖呵を切って嫁いだものの、どうにもならず、この結婚生活がだめになったら自分の面子がつぶれると思いましたが、面子なんかつぶれても構わない、神が私にこの家から出て行けと言うのなら、即座に出ようと決心したのです。

その覚悟でやってみることにしました。すると不思議なことに、「be a better wife」—よりよい妻になれという言葉が出たのです。彼のためや日本の封建制の中で言うベターワイフだったら冗談じゃない、御免こうむると思いましたが、世界を変えるための、そういう新しい意味でのベターワイフなら、確かに今の自分はあまりグッドワイフだとは思わないからやってみようかと思ったのです。それが私の MRA との最初の出会いです。それ以来、毎朝静まって、その日に自分のすべきことは神が与えることだと思って生活してみたら、毎日の行動が少しずつ変わってきました。

それから、いろいろなことがありまして、1938（昭和13）年の暮れ、アメリカから MRA に以前から関与しているビルマ人のマ・ニエンタ（愛称マミー）という女性教師が1カ月間来日し、私はその間通訳を務めました。彼女は非常に精神

的な人で、私は彼女の影響を大変受けました。そのころの私は、ガイダンスといっても半分眉唾で、どんな答えを出そうかしらと思いながら行っていたのですが、ある朝、マミーに会うために主人と二人で出掛けようとした時、主人が「今日の僕のガイダンスは100円持っていくことだ」と言ったのです。当時の100円といったら大金でしたが、私は何気なしに「ガイダンスがそうだったら持っていけばいいんじゃない」と言い出掛けました。そして、何人かでマミーを中心に話をしていた時、上海からマミー宛に電報が届きました。1月何日かに MRA で会議をするから上海へ来いという内容でしたが、当時、飛行機はすべて軍が押さえていたので、一般人が乗るのは不可能だと、周りにいた何人かの人は言いました。その時マミーがふいに手帳を開き、自分のガイダンスによると「1月4、5、6日に上海へ行け」と書いてあると言うのです。彼女は、神の意志なら自分は行くことができる、神の意志でなければ行くことはできないのだから、何も心配することは無いと言いました。

ちょうどその時、私の兄が日本で民間初のパイロットだったものですから、マミーを上海へ行かせるためにはどうしたらいいか相談しようと、彼女と主人と三人で兄のところへ行きました。その際、マミーが主人に「これが私の持っているお金です」と言って中を見せず渡しました。主人もその中身を見ずに受け取り、交渉の場へ入って行きました。しばらくして出てきた主人は驚いた表情で、「1月のある2日間を一人の大佐が飛行機を予約しているのだが、どちらか1日が空くから空いた方の日に乗せてくれるそうさ。その運賃がなんと、自分が持っていった100円と、マミーから受け取ったお金でちょうど金額だった」と言うのです。

それから2年後の1941（昭和16）年1月、私の主人は召集で満州の牡丹江に行き、43（同18）年に職業軍人でない人たちの家族呼び寄せが始まりました。私たちはその第1号になり、主人から「牡丹江へ来い」という手紙が来ました。来いと言っても、姑も祖母も同居しておりましたので、私が決めるわけにはいかないと思い、まず姑に聞いてみますと、姑は祖母に聞きなさいと言う。私は主人に祖母宛に手紙を出してくれという手紙を出したのですが、主人から自分で決めな

いという返事が来たので、ガイダンスで決めることにしました。すると、ガイダンスは「すべてを祖母に託すこと」でした。そこで祖母にお伺いをたてたところ、「男が戦場に行くとき、奥方がついて行くものではないと私は思っています。ついて行く女はほかにいるはず。けれども今は時代が違っている。即答はできないので1週間時間をください」と言うのです。その1週間は、私は自分の運命を祖母に託して、何でもそれに従う覚悟でした。1週間後、お返事をいただきに参りますと、「自分の常識では判断できない。けれどもあなたは私の言うことを素直に聞いてくれると思うので言います。あなたの判断でなさい」と言われたのです。

そう祖母が言ったのには理由があって、私が MRA と出会った当初、自分がいかに自分本位であったかを知り、周りの人にとにかく謝った時、祖母に「今まで表面的には頭を下げていましたが、心の中ではいろいろ批判申し上げておりました」と素直に言ったのです。祖母は多分驚いたのでしょう。その時は何も言いませんでしたが、多分その時の影響があると思うのです。

祖母から許しが出たので、3人の子ども（3歳、2歳、5カ月）を引き連れて満州へ参り、2年近くいたのですが、1944（昭和19）年の暮れ近くになると、物の配給が増え、毎日のように飛んでいた飛行機が見えなくなり、どうも様子が変わるのです。私は日本が負ける日がそう遠くないと感じ、負ける時にここにいることが正しいか正しくないか、主人と二人でガイダンスで決めようということになりました。すると二人とも、私が子どもを連れて日本へ帰るべきだという答えが出たのです。無事に私たちは日本へ帰ることができました。このように、ガイダンスに従うと自然に道が開けるのだなあと思いました。

そして、1946（昭和21）年、アメリカから MRA の人が来日したのをきっかけに、日本でも MRA を始めようではないかという動きが始まりました。

星野 今のお話というのは、恐らく尾崎行雄氏の影響を受けてお育ちになった相馬さんの、ある意味で戦前の日本の良識の系譜を結晶されたようなお話と受け止めてお伺いしておりました。大変貴重なお話をありがとうございました。

## MRA 設立50周年コ－会議までの2年間

星野 MRA というのは、ひとりでできたのではなくて、相馬さんに代表されるような方々が、いろいろな人生を背負われながら、そうしたものを乗り越えて、大切なものを今日までお育てになってきたのだらうという気がいたします。

そこで、今回の50周年のコ－会議について会議の成功を支えられた藤田さんからお話を伺いたいと思います。

藤田 ちょうどマウンテンハウスができて50年。いわば20世紀半ばの時点で、この「和解」のセンターができたのです。

今回の会議にも出席されていたインドのラジモハン・ガンジーさんが、「今世紀の紛争はどこから始まったか」というと、象徴的な場所が第一次世界大戦が始まったサラエボである。今、今世紀が終わりに近づいているが、やはり世界の紛争の焦点の一つがサラエボである。サラエボで始まり、サラエボで終わろうとしている今世紀を、和解の世紀にどのような形で終わることができるか」と言われました。

日本に置き換えてみますと、今世紀は日清戦争直後、日露戦争直前に始まっており、その直後に韓国統監、併合があります。今世紀の終わりにあたりまして、今年、日中関係は国交回復後最悪、日露関係は基本的な関係をまだ作り得ていない、日朝・日韓関係も韓国が分断国家ということも十分な解決がついていません。

従って、紛争から対話や和解への橋渡しをどうしていくかということが、21世紀を迎えるにあたって、非常に重要な要因ではないかと思うのです。実は、その辺の秘訣がこの「和解」のセンターにあるのではないかと、20年程 MRA の活動をしていて感じていたのです。

冷戦が終わるまでは、こうした和解の活動というものが、いわば認知されない動きをしていました。といいますのは、冷戦時代は、初めに軍事同盟ありきといいますか、軍事的、経済力、そういった関係のハードの要因が紛争要因であるとされてきました。ですから、それ以外の要因が、紛争の解決に入り込む余地がなかった、認知されなかったのです。ところが、ベルリンの壁が崩壊し、いろいろな対立要因が、冷凍

庫の中から解凍されて出てきてみると、実はいろいろな要因があったことが分かったのです。中でもソフトの要因一憎しみ、相手に対する偏見、犠牲者意識、被害者意識、妬み、あるいは歴史的な民族間の怨念だったり、宗教間の偏見だったり……。そういったものに対応する秘訣というものが、突如として脚光を浴びることになってきました。実はコ－のマウンテンハウスには、そういう仲立ちの秘訣が50年にわたって宝庫のようにたくさん積み重ねられてあったのです。

ところが残念ながら、冷戦時代には地政学的な視点から対応をしようとしていましたので、宝の持ち腐れでした。その使われてない宝物を、ぜひ世の中にさらして、国際機関や各国の政策の意思決定者の方たちにもぜひ使っていただきたいと思ったのです。1992(平成4)年以降、国連ガリ事務総長が「平和への課題」「開発への課題」を提案されたこともあり、「平和」や「開発」が前提としての和解に MRA の仲立ちの秘訣が大きな力になるのではないかと思いついたのが、2年前です。それから2年間、50周年のコ－会議に向けて準備をまいりました。

準備をしていく中で非常にありがたかったのは、和解をするためには「まず自分の認識を変える」ということの重要性について、政策や国際紛争に携わってきたかなりの方々が、実は気付いていたということです。ただ、自分の政策なり、実際の政治活動、外交活動に生かすという術(すべ)を模索しておられたということが分かり、コ－の会議がその方々の仲立ちをしたにすぎないと思っております。

自分を変えることによって、相手に対する見方を変える。相手に対する見方を変えることによって相手に対する姿勢を変える。そうすることによって相手の自分に対する姿勢もおのずから変わってくるというプロセスを、たくさんの方々の事例を見ていただくことによって、一番いいものを掴んでいただけるように工夫をしようと、そのためのプログラムを2年にわたって組み立てました。

まず、紛争解決にかかわった方々にはどんな人がいるのであろうか、そういった方々がどんな形で紛争解決をなし得てきたかを洗い出すことをいたしました。次に、東京、ワシントン、パリ、ジュネーブ、ロンドンをベースにネットワーク

をつくりました。そして会議の時には外交官、政治家、国際機関の方に加え、実際に現場で人知れず仲介・和解の活動をしてきた方も一緒に、ワークショップという形で経験をお話していただいたのです。ですから、いわゆる普通のペーパー



心じた ゆきひさ  
(旧)国際 MRA 日本協会理事  
衆議院議員

によるプレゼンテーションをする方と、自分の経験を話す方との組み合わせが全体の6日間の中で非常にいい相互補完関係になったと思います。その組み合わせを一緒に考えるというプロセス自身が、ある意味では、和解のプロセスそのものであったと思います。

今までの平和会議などでは、まずアジェンダを決めるのに和解ができない、そのアジェンダについてどう取り扱うかについて和解ができない、大きな会議になりますと、座席や発言順などで和解ができないということがあります。しかし、2年間、時間をかけて、少し忍耐力を持ちながら、辛抱しながら行ったおかげで、そのプロセスの段階でそういった類の困難を越えて、かなりの和解ができ上がっており、その雰囲気、初めて来た方にも感じていただけたようです。

ある意味では苦勞ですが、それがまた実際に運営した者にとっては大変やり甲斐でもあり、冥利に尽きたということでした。

## 和解は世界づくりへの入口

星野 先程も言いましたが、グランディーさんのご挨拶の中で言われている、「和解はいわば新しい世界づくりへの『入口』(door)と考えたい」—この言葉、私はこのように解釈しています。尾崎行雄氏は「争いでものを解決することもあった

が、世界がこんなに小さくなり、人間が広がったのに、今さら武力を使ってものを解決するのはばかげている」と、今から約60年前に言われましたが、グランディーさんの言う「入口」というのは、実は「基礎」ということなのではないかなと思うのです。「door」という意味は、新しい世界に入る「door」であって、さらに言えば「door」に入るという心構えが新しい時代をつくる「基礎」であると受け止められるかなと解釈しているのですが。

藤田 争いが終わった後というのが秩序の始まりで、秩序の始まりには「基礎」が要るわけです。争いが終わった後というのが、人間がある意味で一番謙虚にもなりますし、それまでのネガティブな経験を越えようと思えますし、そのための一番いいチャンスではないかと思うのです。ただ、その後、何となく枠組みで決められたような流れの中に長くおると、その原点を忘れてしまう。結局自分のためだけを考えると人間は小さくなってしまおうと思うのです。

先程、尾崎氏のお言葉の人間が大きくなったというのは、自分のことよりも、もう少し大きな存在について考えられるようになった時に人間が大きくなるという意味だろうと思うのです。さまざまな科学技術の発達により、以前にも増して地球が狭くなり、隣人たちとも直接コンタクトしているわけですから、人間それぞれが自分を見つめ、自分を律することができないと、争いが増長してしまふ。自らを律することができるかどうかが今後の課題であり、その原点が相手との和解であり自分との和解であるのかと、「入口」について私はそんな印象を持っているのです。

冷戦時代は、軍事的力や経済だけが紛争要因でしたが、予防外交の場合にはその対象となる要因も時系列も広がっていると思うのです。つまり、いろいろな要因から NGO(非政府組織)も「入口」を求めているのです。紛争解決の「入口」自体が非常に多様になってきています。

それからもう一つ重要なことは、和平というのは非常に包括的に考えていかなければならないということ。ある時期いったん停戦をしても、その後繰り返すことがあるのです。停戦後に暫定政府ができて、その後の開発をどのようにしていくか、国づくりをどのようにしていくかが重要なのです。

そういう意味では、日本の活躍する場がたくさんあります。ぶり返さないというのも、予防外交の非常に重要な意味ではないでしょうか。

予防外交というのは、まず「入口」が多様であり、交渉に持っていき、停戦にこぎつけ、暫定政府をつくり、復興して、そしてあとの火種をさらに予防的に摘み取っていく。そういう歴史的・継続的に動く必要がある。となってきましたと、政府と民間とのチームワークが非常に重要になってくる。ある地域では、政府あるいは国連機関は直接かかわれないけれども、NGOがかかわることができる。それからある段階でいろいろな政府が出てきた場合には、今度はそれらの政府と国際機関とのチームワークで対応しなければいけない。また、歴史的に長い展望で取り組むわけですから、最初からある程度予想して、枠組みをつくっておいて、その枠組みに入ってくるような状況を各派、当事者に示していく。

## 歴史の傷

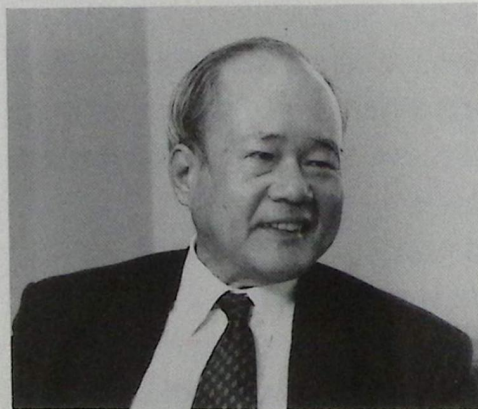
相馬 予防外交の目的は何か。やはり世界の幸福、結局は人々の幸福です。ドライ・ラマ師も「生きる目的は幸せになること」とおっしゃいましたね。ただ、何が幸せかを考えなくてはならない。国のあり方を、国民国家・ネーション・ステートのあり方を、21世紀に向かってみんなが本気になって考えなければウソだと思う。古いものに縛られて国民の幸せを無にしてはいけないと思うのです。

韓国との問題にしても、歴史認識の問題でいつもちぐはぐになる。それには第三国などが間に立って、ドイツとフランスが和解したように、もっとオープンに対話を重ねていくことが必要だと思うのです。歴史認識については、もう一度はつきり戦争の起こる原因、これからだつて起こる可能性がある要因、それをどう取り除くかということを認識し、先程のお話、私は「入口」よりも「出口」だと思うのです。もう新しい世界に向かって出ていかなければいけないのです。日本は一体どうするのか。いつまでも閉じ込めていたのではどうにもならないと思って、歴史を見直し、洗う必要があります。ドイツは今でもそれをやっているそうです。

藤田 最近会ったグループで、日本の高校の先生が中心になり、日本と韓国で共同で授業をやっている人たちがいます。韓国について、日本の学校で授業をする。韓国においても、日本について授業をする。そしてお互いに訪問をし合って、韓国の学生たちが日本について感じていることを作文を書かせる。そこに日本の先生が出て行って、日本のことについて教える。韓国の方も日本を訪問し、一緒に同じテーマについて話し合いをするという、日韓共同授業というのを行いました。

また、伊藤博文を殺した安重根の看守であった千葉十七が、安重根の人となりや考え方に大変感激をして、宮城県にある自分のお墓の脇に安重根のお墓を作ったのです。そして、1996（平成8）年秋、韓国の安重根のご家族が宮城へ来まして一緒に供養をしたという、いい話があるのです。私はそういういい話を伝えるということ、どんどんやっていくのもいいと思いますね。

星野 私も最近いい経験をしました。10月に、「日本計画行政学会計画賞」の最終審査会がございまして、私はその審査員を務めました。1996（平成8）年の最優秀賞に選ばれたのは、宮崎県南郷村（なんごうそん）という、九州山地に囲まれた



ほしの しんや  
総合研究開発機構理事長

奥深い山里で人口わずか3,000人の小さな村です。その村が「百済の里づくり」をテーマに村おこしを行っています。

7世紀に滅亡した朝鮮半島の国「百済」の王族が日本へ亡命し、南郷村にたどりついたという伝説が学術的に裏付けられたことを足掛かりに、村民一丸となり「百済の里づくり」に取り組みました。南郷村の神社には百済王族の父禎嘉王がまつられ、伝説を伝える祭りも受け継がれ、王族の古墳も実在しており、王族の遺品として伝わる銅鏡群は奈良正倉院の

御物と同一品であることから、「西の正倉院」を建立するなど、さまざまな活動を行っています。そこへ韓国の人々がどんどん来てくれるようになり、日本より韓国の方で有名になってしまったそうなのです。村長さんはじめ村民の皆様のひたむきの中に伸びやかな生きざまが映し出されており、大変感銘を受けました。

相馬 日本は戦後のそれこそ東京裁判思考ではないけれど、それでこんなになってしまったとか、占領されたからこんなになってしまったと、全部そのせいにしておりますよね。ところが、精神的なものがなくなって困っているのは、日本だけではなく、世界的な問題なのです。ぜひ、世界と一緒に救わなければいけないと思います。

星野 おっしゃるとおりだと思います。例えば、今われわれが使っているいろいろな仕組みは、欧米が開発してくれたものを使っているわけですが、多分21世紀になると、アジアの方からの発信できる文化や何か徐徐に出てきて、それが、数世紀先行したヨーロッパの文化と交流して、混ざって、新しい、地球全体をカバーできる、そういう文化ができてくるのではないかと思うのです。そういう21世紀というのは楽しみがあるのではないのでしょうか。

## 報徳精神が教えるもの

相馬 私は二宮尊徳をすぐ引き合いに出すのですが、彼ほど世界に通用する哲学を持った人は少ないと思うのです。彼の道歌などに、「日々日々に 積もる心の塵あくた 洗い流して我をたずねん」というのがあります。コー会議でヒンズーの聖者が、「人間が一番やりやすいことは人を非難することだ、一番難しいことは己を知ることだ」と言ったという話を聞きましたが、尊徳の言う「我をたずねん」と「己を知る」という言葉とは深いつながりがあるのではないかと感じました。

面白いのは、二宮尊徳が荒れている日光の天領に行った時、「荒田を耕すのは心田から」と言ったのです。この「心」の田を耕すことから「つていうのは、まさにMRAですよ。村が荒れるのは、男性が「飲む、打つ、買う」からであって、女性はそのをしない。そこで、彼は若い女房たちを集めて説教す

るわけです。すると、女性はおしゃべりですからいい話を聞けば、井戸端会議の中で、あるいは家へ帰ってしゃべる。そうすれば亭主にも子どもにも影響する。尊徳はそういうことを計算していた男ですよ。

藤田 私どもはよく、外国人を報徳博物館（小田原市）へご案内します。そこで勉強をしますと、すごいなと感心します。昔聞いた二宮尊徳と違ういろいろなことがあるのですよね。

相馬 宇宙に存在するすべてのものに備わっている長所（徳）を生かす（報いる）という、「報徳精神」は世界に通用するものです。

星野 内村鑑三さんも代表的日本人の一人に二宮尊徳さんを挙げていますね。

大変有意義なお話を聞かせていただきました。長時間どうもありがとうございました。

（1996年12月2日収録）

### 相馬雪香（そうま ゆきか）氏

明治45年生。女子学習院卒業。尾崎行雄氏の三女。昭和12年旧子爵 相馬恵胤氏と結婚。戦後、リーダーズダイジェスト勤務、MRA、全日本婦人連盟、都政刷新連盟等の運動に参加、アジア婦人団体連盟会長などを務め、32年 尾崎行雄記念財団設立と同時に副会長に就任、現在に至る。

### 藤田幸久（ふじた ゆきひさ）氏

昭和25年生。慶應義塾大学文学部卒業。昭和50～52年 MRA 国際親善使節「Song of Asia」で世界14カ国を歴訪、56～57年 MRA ロンドン駐在、国際 MRA 日本協会専務理事、コー日米欧経済人円卓会議コーディネーター、難民を助ける会常任理事などを務め、平成8年衆議院議員当選（民主党）。